昆虫類　＜チョウ目　タテハチョウ科＞　　愛知県：絶滅危惧Ⅱ類　（国：絶滅危惧Ⅱ類）
INSECTA　＜LEPIDOPTERA　NYMPHALIDAE＞　　AICHI：VU　（JAPAN：VU）

ウラギンスジヒョウモン　*Argyronome laodice japonica* (Ménétriès)

【選定理由】

本種は、草原性のチョウで、かつては名古屋市などの低地も含め全県にわたり比較的多く観察されていた。近年はこのような低地のみならず、山地の草原でも個体数はかなり減っている。全国的にも減少しているという。

豊田市(旧旭町), 1999 年 6 月 20 日, 高橋匡司 採集

【形　態】

前翅長 29mm 程度、ヒョウモンチョウ類の中ではやや小型である。♀は大型、翅形は丸みを帯び前翅表面の先端に白点がある。後翅裏面の外半分が褐色をしている。この特徴はオオウラギンスジヒョウモン、メスグロヒョウモンの♂に共通するが、前翅の翅端・外縁のくびれ度合い・後翅の点状の黒紋の有無などから容易に区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市などの低地から、県内各地の丘陵地・山地まで広範囲にわたり分布する。

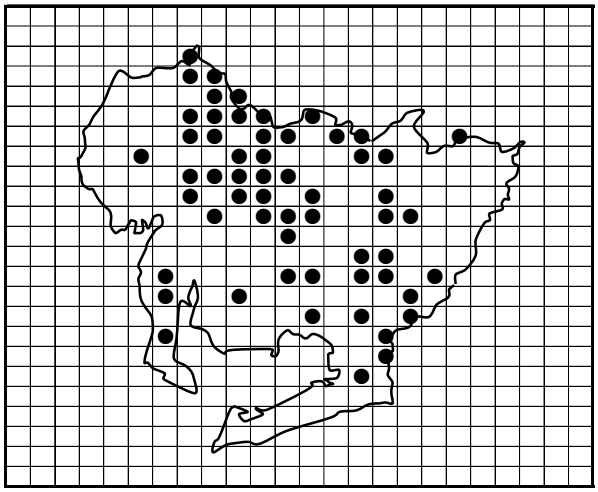
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州南部まで分布する。種子島・屋久島およびそれ以南の南西諸島からは知られていない。

【世界の分布】

サハリン、朝鮮半島、中国東北部、ユーラシア大陸の北部まで分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本種がもっとも多く見られるのは、標高 500～1,000m くらいの疎林の周辺の草原で、開けた草原よりも低木を交えた草原や疎林を好む習性がある。愛知県や岐阜県の低地では、ヒメヒカゲの生息する湿原に、ヒメヒカゲとほぼ同じ時期に湿原の上を飛翔している本種がよく見られた。

低地の産地では、年 1 回 6 月を中心として現れ、盛夏には姿を消し、秋に再び活動を開始し、アザミ類、ヒヨドリバナ、ソバの花などで吸蜜する。卵ないしは孵化したままの 1 齢幼虫で越冬する。飼育下では、各種のスミレ類を食し羽化する(高橋, 1984; 田中, 2004)。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年、名古屋市内、豊橋市内や濃尾平野、知多半島などでの記録は著しく減少している。以前比較的多く産した尾張や三河の低山から奥三河の山地でも個体数の減少が著しく、まれにしか確認できない。減少の理由は明らかでない。かつて多産した時代にあっても、本種の幼虫を野外で発見する機会は著しく少なく、したがってその生態や食草との関係はほとんどわかっていない。

【保全上の留意点】

本種の減少が単にスミレ類全体の減少によるとは考えられない。現時点で本種の生態に不明な点が多く、具体的な保全対策の提案が困難である。しかし、本種を含め草原性のチョウが全般に減少している現実から、草原の保全は最低限の条件であろう。

【引用文献】

高橋 昭, 1984. チョウ類. 愛知の動物: 133. 愛知県郷土資料刊行会.
田中 蕃, 2004. レッドデータブックなごや 2004 動物編: 164. 名古屋市環境影響評価室, 名古屋.

【関連文献】

白水 隆, 2006. ウラギンスジヒョウモン. 日本産蝶類標準図鑑: 213-214. 学習研究社, 東京.
高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 253. (財)旭高原自然活用村協会.

（2009 年版を一部修正）